

平成 23 年 6 月 6 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2009～2010

課題番号：21730654

研究課題名 (和文) 1 歳児保育の質と保育者の実践知に関するフィールド調査研究

研究課題名 (英文) Field studies on quality of child-care for 1-year-old and practical knowledge of nursery teacher

研究代表者

藤本 松香 (古賀 松香) (FUJIMOTO MATSUKA (KOGA MATSUKA))

四国学院大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：70412418

研究成果の概要 (和文)：1 歳児保育の質と保育者の実践知について、インタビュー・質問紙・観察調査を行い検討した。1 歳児保育の難しさは、1 歳児保育の特質を踏まえた援助への志向と構造上の実現困難との間のジレンマと捉えられ、その質の向上には、保育所定員、クラスサイズ、保育士配置についての基準の検討・改善が望まれる。また、保育者は各子どもについて詳細な実践知を有し瞬時の判断を行うが、その判断には各園の文化的側面が影響を及ぼすことも明らかとなった。

研究成果の概要 (英文)：In this study, the quality of child-care for one year old children and practical knowledge of nursery teachers were surveyed by method of interviews, questionnaires and observational investigations. Difficulty of child-care of one year old children is recognized the dilemma between the intention to do the caring based on the characteristics of child-care for one year old children and the structural difficulties to put into practice. It seems necessary, in order to improve the quality of child-care, to examine and revise the standards concerning authorized numbers in nursery centers, class sizes and the arrangement of nursery teachers. In addition, while nursery teachers usually have detailed practical knowledge on each child and make instant decisions, it has become evident that the cultural features of each nursery centers have an impact on those decisions.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：1 歳児保育, 乳児保育, 保育の質, 児童福祉施設最低基準, 実践知

1. 研究開始当初の背景

| (1) 現在の日本の認可保育所における 1 歳児

保育は、児童福祉施設最低基準に定められた保育士人数配置 1:6 の下に行われている。しかし、1 歳児の発達の特徴は個別援助を多く必要としており、厚生労働大臣告示となった保育所保育指針にある一人ひとりに応じた丁寧な保育を目指すとき、1:6 という基準は大きな制約となるのではないか。

(2)平成 20 年 6 月にまとめられた「地方分権推進要綱(第 1 次)」では、児童福祉施設最低基準の見直しについて、国は標準を示すにとどめるといった提言がなされた。これは児童福祉施設の形骸化をもたらし、地方における児童福祉の粗悪化を招きかねない。また、公立保育所への保育所運営費一般財源化により、公立保育所の民営化が進み、経験年数が浅く実践知に乏しいと思われる保育者が増えている現状がある。このような中、1 歳児保育は(1)に挙げた難しさを抱えながら、どのような実践知がその保育実践を支えているのか、検討する必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、保育所における 1 歳児保育の質の担保と向上のために何が必要か、またその実践を支える保育者の実践知について検討することを目的とする。

(1)1 歳児保育の難しさを保育者はどのように捉えているか、明らかにする。

(2)1 歳児保育の難しさがどのような保育の質(操作性の質、プロセスの質等)と関連しているのか、明らかにする。

(3)1 歳児保育を担当する保育者が実践場面においてどのような実践知を用いているのか、明らかにする。

3. 研究の方法

(1)保育者が 1 歳児保育の難しさをどのように捉えているか検討するため、1 歳児保育担当保育者を対象とした半構造化面接を行った。

記録方法: IC レコーダーおよびメモ

対象: 四国地方の認可保育所 7 園において 1 歳児保育を担当している、または担当の経験のある保育者 9 名と主任または施設長 3 名(経験年数レンジ: 4~42 年)。

分析方法: 佐藤(2008)を参考に質的データ分析を行った。

(2)1 歳児保育の難しさがどのような保育の質(操作性の質、プロセスの質)と関連しているのか検討するため、香川県下の全認可保育所および認定こども園を対象としてアンケート調査を行った。質問紙は 1 施設につき

以下の 2 種類を配布した。まず、施設長または主任保育者を対象とした質問紙では、主に各施設の操作性の質を問う内容とし、担任保育者を対象とした質問紙では、主にクラスにおける操作性の質とプロセスの質を問う内容として構成した。また、担任保育者を対象とした質問紙は、1 クラスにつき 1 部の回答を依頼した。回収率は 78.6%で、欠損値の多い質問紙等を除外した有効回答数は 212 となり、それらを分析対象とした。分析には、統計パッケージ、PASW statistics 18 を使用した。

(3)1 歳児保育の担当保育者が実践場面で用いている実践知について検討するため、保育観察および午前保育後のインタビューを継続的に実施した。公立保育所および私立保育所各 1 施設の 1 歳児クラス(各 1 クラスのみ)を対象とした。観察期間は 2010 年 5 月下旬から 2011 年 2 月中旬までで、各施設隔週 1 回実施した。記録にはビデオカメラおよび主担任には指向性マイクを上腕に装着してもらった。また、手持ちカメラとして CAVScene を使用し、保育後のインタビュー時に CAVScene で録画した保育場면을参照し、保育の振り返りを促した。また、インタビューは調査対象者の了解を得て IC レコーダーで記録した。

4. 研究成果

(1)インタビューの質的分析の結果、保育者が捉える 1 歳児保育の難しさは、【1 歳児保育の特質を構成する条件】⇒【保育のポイントの認識と工夫】⇒【保育者の 1 歳児保育に対する思い】という 3 つの枠組みの影響関係で整理され、その全体像は「1 歳児保育の特質を踏まえた援助への志向と構造上の実現困難との間のジレンマ」と捉えられた。

まず、分析 1 では、1 歳児保育は、その発達の特徴や子どもと家庭の変容により個別援助が必要とされる条件と、1:6 の保育士配置基準という条件が交錯した状況にあることを明らかにした。

また、分析 2 では、そのような状況の中で、保育者が保育のポイントをどのように認識し、保育の工夫がなされているか、整理した。1 歳児保育の特質を構成する条件の中には現代的な課題も多く挙げられていたが、ここでみられた数々の保育者の認識は、現代的な新しさをもつというより、以前から重要視されてきた事柄であった。現代的な課題を乗り越えるために、保育プロセスにおける基本的事項がより一層重要視されるに至っていると思われた。このような質重視の志向は、保育所保育指針改定の影響だけでなく、現代の子どもや保護者とかかわる具体的な体験の中で蓄積された知識、つまり保育者の実践知が

影響していると言えるだろう。

一方、保育の構造上の工夫では、1歳児の発達の特徴から少人数での保育が有効であるという認識がなされ、子どもの少人数グループ化や空間使用の工夫がなされていた。現在の児童福祉施設最低基準ではクラスサイズの規定がないが、この点について今後検討される必要があると思われる。また、全保育所において発達差に応じた保育を保障するためには、保育室と保育者がより多く必要とされていると考えられた。

保育士の配置については、加配保育士や補助職員を自助努力によって雇用していることが現状としてみられた。今後は配慮の必要な子どもや保護者、途中入所が一層増加すると予測されることから、1:6より少ない保育士の配置基準や途中入所児に対する加配保育士の積極的導入が求められる。

分析3では、子どもの成長により保育がスムーズになると認識されていた。このことから、1歳低月齢児には高月齢児とは別より手厚い配置基準を新たに検討する価値がある。

また、保育者は人数比率低減の効果を認識しているが、実現可能かどうかは保育実施上の別問題である。保育者は保育所保育指針にある、一人ひとりの状態に応じ、子どもが自分でしようとする気持ちを尊重する保育、自我の育ちを見守り、その気持ちを受け止め、友達とのかかわり方を丁寧に伝える保育を志向している。しかし、丁寧なかかわりを必要とする状況があちこちで同時に生起する1歳児保育において、1:6という保育士の配置基準が大きな足かせとなり、保育者に保育不全感を感じさせている。保育者は、1歳児保育の特質を踏まえた援助への志向と構造上の実現困難との間にジレンマを抱えていると言える。

全対象者が言及した保育不全感は、丁寧な保育への志向と構造上の実現困難という相容れないジレンマの中で、保育の質を向上させたいと願う保育者のネガティブな自己評価となり、深刻な事態をもたらすこともあると思われる。加えて、保護者との関係の難しさは若い保育者には一層深刻であろう。解決の方策が見当たらないジレンマが大きくなれば離職へと結びつく可能性もある。力量ある保育者が求められる1歳児保育にとって、大きな問題である。

保育所保育指針において、保育所は入所する子どもにとって「最もふさわしい生活の場でなければならない」とされている。その保障のためには、児童福祉施設最低基準における以上のような点について、誠実な検討と早急な改定が求められる。

(2) アンケート調査の結果から、香川県の保

育所は公立保育所における非正規雇用の割合が全国平均より高い一方、私立保育所における正規雇用が全国平均より多いことがわかった。今後地域格差は益々拡大することが予測され、この点については全国的調査を継続的に実施する必要性があるだろう。

また、1歳児のかみつきやひっかき等のトラブルに関連する要因として、合計児童数と1歳児クラス所属児童数が挙げられた。今度望ましい保育所定員数やクラスサイズを検討する必要が示唆された。

保育スケジュールとトラブルの関連については、これまでの研究同様、活動の切り替わり時にトラブルが多いこと等がみられたが、保育者のシフト勤務による保育者1人当たりの人数変化や、排泄に誘う時間帯等スケジュールの影響を受けていることが明らかにされた。その一方で、1歳児の発達の姿としてのトラブルもあると考えられ、それらのトラブルに関しては少人数化による丁寧なかかわりが有効であると考えられた。

これらのことから、各保育所の操作性の質に影響を及ぼす児童福祉施設最低基準において、定員数やクラスサイズ、保育士配置基準の検討を行うことが重要な課題であり、また、各保育所におけるプロセスの質について、少人数化や担当制といったスムーズな保育のあり方を検討することも有効であると言える。

(3) ①観察結果について(2)の成果から、コダーイの育児担当制を取り入れている私立保育所の保育における食事場面の詳細な分析を行った。保育者は少人数グループ化した子どもとの食事場面において、どのような援助を行っているか検討したところ、保育者は子どもの食行動の視認を起点として援助を開始することが多いが、ある子どもの援助を行いながら他の子どもの食行動の視認を行っており、どちらの援助を優先させるかという優先性の判断を瞬時に行っていると考えられた。また、援助行動については、食物摂取に対する援助や文化的摂食行動獲得に向けての援助が細くなくされており、子どもが主体として食行動を獲得するための援助の頻度が高かった。

②発達の様相の移り変わりが激しい1歳児保育において、保育者は環境と子どものかかわりをどのように捉え、再構成を行うのかという点について検討した。保育者は意図的に保育室の環境構成を行うが、その環境の下での子どもの姿において、保育者の意図と異なるものが多くみられ、実践上の難しさを形成していた。そのことについて、保育者は子どもの環境とのかかわりを捉え、子どもの欲求を認識しながらも、施設構造上の条件や保育

所の保育方針から柔軟な対応が取れないというジレンマを抱えることが見出された。しかし、子どもの欲求に応えられていない状況に対して施設長も問題意識を持ち、子どもの欲求に対して能動的にかかわろうと保育環境の改善に向けて取り組むことで、保育者は環境にこめる意図を子どもの姿に合わせて再調整し、自らの実践に対する肯定的な語りが増えることが見出された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

古賀 松香, 1歳児保育の難しさとは何か, 保育学研究, 査読有, 2011(印刷中)

〔学会発表〕(計4件)

①古賀 松香, 1歳児保育の質をめぐる現状と課題—現場の声を通して—, 日本保育学会第63回大会, 2010年5月22日, 松山東雲女子大学

②古賀 松香, 1歳児保育の構造の質とプロセスの質について—アンケート調査を通して—, 日本乳幼児教育学会第20回大会, 2010年10月23日, 関西学院西宮聖和キャンパス

③古賀 松香, 1歳児の食事場面における保育者の援助, 日本発達心理学会第22回大会, 2011年3月27日, 東京学芸大学

④古賀 松香, 1歳児の子どもの姿と環境構成—保育者の意識変容に着目して—, 日本保育学会第64回大会, 2011年5月22日, 玉川大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤本 松香 (古賀 松香) (FUJIMOTO MATUKA (KOGA MATSUKA))

四国学院大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号: 70412418

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号:

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号: